

狼男にさよならを

法学部
法律学科 2 年

清水翔

振り返ってみると、幼い頃の私は、祖母にべったりだったのを覚えている。

「おばーちゃん。おばーちゃん。お話聞かせて！」

そう、たしかこんな感じだった。お昼ご飯を食べた後、あったかいお日さまの光が差し込む窓辺で椅子に座つくつろぎ、そこから見える景色を遠い目で眺めていた祖母。

私はそんな祖母の膝に頭をのせながら、祖母に物語を話すようねだっていたのだ。祖母が話す荒唐無稽な物語は、幼い頃身体が弱く外に遊びに行けなかった私にとって、数少ない娯楽の一つだった。

大抵は祖母が話している最中に眠ってしまい、どこまで聞いたか思い出せなくて、今でも覚えているという話はあまりない。

そんな中、幼い私が何度も聞かせて欲しいと願ひ、結末まで諳んじられるほどはつきり記憶に残っているお話もあった。

「いいよ、どんなお話が聞きたいんだい？」

祖母は窓の外から私の方に目を向け、年齢を重ねてしわしわになった顔でにつこり微笑む。

「オオカミさんが出てくるお話がいい！」

祖母は眼鏡越しの瞳をはっと見開き、驚いたような表情を浮かべる。

「それはこの間珍しく貴女が最後まで聞いたお話じゃない。他のじゃなくていいの？」

「うん」

しょうがないねえ、と呟きながら、祖母は私の頭を撫でてくれた。私はそんな祖母の顔を下から見上げる。私がこの話をよくせびったのは、お話が面白かったと言うのもあるけど、それだけではなかった。

訥々と話す祖母の横顔は、懐かしむような、愛おしいような、そしてどこか恥じらう少女のような表情をしていた。そんな表情が、私は大好きだったからだった。

「私は――」

月明かりの下で、獣と少女は少しの間語りました。帝国の北端にある険しい山脈に住む狼と、その麓の村に住まう少女。山と村、獣と人、分かれていた境界を踏み越えて、彼らはこの夜交わったのです。

「モーント！ どこにいるの、モーント！」

帝国の北端にある山脈。その山道とは名ばかりの獣道を、籐籠を下げた十代半ば頃の少女が軽い足取りで登っていく。左右を見回し、誰かを呼びながらも動く事がない様子からは、少女がここを歩き慣れている事が窺える。三つ編みにされた淡い金色の髪は、少女の動きにあわせて揺れていた。

「そんなに大きな声を出さなくても聞こえてるよ、クリス」

少女――クリスに答えたのは、クリスと同じ年頃の少年だった。モーント（月）の名に恥じない見事な銀の髪は、肩口で切り揃えられている。

「もう、探したわ。どうしていつもの一本杉の下にいないのよ」

「別に、待ち合わせをしている訳じゃないし、クリスがいっ来るかなんてわからないのに、ずっとあそこにいるわけにはいかないじゃないか」

腰に手を当て胸を張りながら不満を表すクリスから、モーントは目を逸らしながらもっともな反論する。

「ふん、だ。いいわ、せっかくお昼ご飯を作ってきてあげたのに、モーントには分けてあげないんだから」

「いや、別にそれはいいんだけどね」

「なによそれ！」

クリスはモーントの言い種に、顔を真っ赤にして怒りを露わにする。

「だって前に作ってきた昼ご飯って、自信満々だった割りに表面焦がしたり、逆に中まで火が通ってなかったりの悲惨な出来だったじゃないか」

「うっ……だ、大丈夫よ！ 今度はちゃんと味見したし、あれから練習だったもの」

モーントが以前の失敗を持ち出すと、クリスは急に不安げな表情で俯き、声も尻窄みになっていく。目尻にはうっすらと雫が浮かんでいた。そんなクリスに罪悪感を抱き、モーントは彼女が持っていた籠をひったくり、中をのぞき込んだ。入っているのは、葡萄酒の入った皮袋と、腸詰めやザワークラウトキャベツの漬け物等を挟み込んだバゲットサンドだった。緊張と不安の混じったクリスの視線を感じながら、大きく口を開けてかぶりついた。

「――綺麗……」

自分の身長のはるうかというとても巨大な狼を前にして、少女の口をついて出たのはそんな言葉でした。地を踏みしめる強靱な四肢。冷たい夜気で白い息を吐き出す口は、びっしりと並んだ鋭い牙が覗いていて、少女など一飲みにしてしまえるでしょう。

けれど、少女が目を奪われたのは、その巨大な獣を覆う、夜空に浮かぶ月のように美しい銀色の体毛でした。汚れも、傷みも見られない、僅かな風でさらさらと流れるそれは、まるで星屑がこぼれるかのように煌めいていました。絶体絶命というこの場において、少女の意識にあったのは、ただただ目の前の獣が美しいという感嘆だけだったのです。

『――何故、君のような娘がここに？』

耳ではなく、狼の声は心に直接響いていました。その雄々しい姿に似合わない、まるで少年のような柔らかい声。

「……………驚いた。普通に美味しい」

「誉めるなら素直に誉めてよ！」

意地悪。と再びふてくされるクリス。ごめんごめんと謝りながら、モーントはゆつくりと味わって咀嚼していく。クリスも自分の分を手に取りかじり付く。自分で言うのもなんだけど、美味しくできたな、と満足した。

ちら、と横目でモーントを見ると、手に付いたパン屑を嘗め取っていた。そんな姿を見ると、モーントは普通の少年にしか見えない。実際、クリスはこの一年ほど、暇さえあればモーントと過ごしてきたが、彼は初めて会った時以外、この姿を取っていた。けれど、クリスは知っている。この、自分と始ど年の変わらない少年に見えるモーントが、自分の何十倍もの時を生きてきた、御伽噺に出てくる本物の怪物――ウェアヴォルフ人狼だという事を。

昔々、高い山と深い森に囲まれた小さな村で、一人の男の子が生まれました。男の子は普通の子供達と違い、人と獣が交じり合った姿をしていました。山と森で隔てられた場所に住む彼らは、遙か昔に獣と交わった事があり、男の子はその血が色濃く出てしまったのです。男の子のお母さんは、村の人から男の子を守るために、生

まれてきた子を死んだことにして、村から離れた炭焼き小屋の納屋に隠して育てました。男の子は納屋の中という狭く暗い世界でだけ生きていましたが、お母さんがいたので寂しくはありませんでした。

ですがある日、お母さんがいつまで経っても納屋に來ないので、男の子はお母さんの言いつけを破って納屋の外に出て行きました。生まれて初めて見る広い世界に男の子は感動し、けれどそんな広い世界に一人でいる事が怖くなったので、お母さん呼びながら村へと駆け出しました。

村の中心にある広場、そこにお母さんはいました。男の子はお母さんを見つけて安心したのか、泣きそうな顔を満面の笑みに変えて近づいていきました。お母さんは男の子の姿を目に留めると、酷く疲れていた顔を青白くして、震える声で「何故納屋から出てきたの」と、叫びました。お母さんの言いつけを破った事を怒られたと思ったのか、男の子はびっくりとして立ち止まりまっつしました。けれど、お母さんは男の子を叱るつもりで叫んだ訳ではありませんでした。広場の周りの家から隠れていた沢山の大人が飛び出してきて、男の子を取り押さえ始めました。見れば、お母さんは足を縄で縛られ、その縄は地面に打ち込まれた杭に繋がっていました。男の子は初

い信仰が残り、千年以上もただ一つの血統が支配している極東の島国。そして、各地で出会ったモーントと同じ、御伽噺に出てくる数々の生き物達。作り話と思えるそれらを、クリスは疑うことなく信じ、想像を膨らませては目を輝かせていた。本当にいるなんて思っても見なかった人狼が目の前にいるのだから、疑おうなんて気は全く起きなかった。

「今日も色々なお話が聞けて楽しかったわ」

「それはよかった」

狭い山道を、肩を並べて降りていく。山に囲まれたこの土地は、平地よりも日暮れが早い。暗くなる前に村に戻らなければ怪しまれるし、心配をかけるのはクリスの本意ではないのだ。建前上は木の実を取りに行っている事になっているので、昼食が入っていた籠には木苺がいっぱいに入っている。モーントが何処に沢山生えているかを知っているから、山をあちこち探し回る必要がない。浮いた時間でモーントの話を聞くのが、クリスが村のみんなに内緒にしている密かな楽しみなのだ。

決して、村の誰にもバレてはいけない。特に、教会の神父様の耳に入ることがあってはいけないのだ。モーント個人の事など斟酌することなく、人狼は邪悪な存在であるとして、教会騎士団を呼

めて見た大勢の大人達にのし掛かれて、訳も分からず泣き叫ぶことしか出来ませんでした。お母さんはその子を離してと泣きながら訴えますが、聞き入れては貰えません。それどころか村中の人達から、汚れた子を皆に隠して育てていた事を責められるだけでした。

そうして、お母さんは村の生家に閉じこめられ、男の子は村を追いついて、二人は二度と会うことはありませんでした。男の子に残されたのは、お母さんから貰った名前と、出て行くときに巻き付けられた、ぼろ切れ同然の服が一着だけでした。

獣の血を受け継いだ男の子は人の群れを追いつて出されました。けれど、男の子が追いつて出てきた森に棲む獣達も、人の血が流れる彼を受け入れることはありませんでした。彼が持つ血である狼ですら、男の子を追害しました。それからずっと、男の子はたった一人で生き続けていきました。生まれた地を離れ、大陸を横断し、海を越えて遙か東の島国すら見て回り、数百年かけて生まれた地に戻ってきた後も、それは変わりませんでした。

「コウモリの話を知っているかい？」

以前モーントの昔話を聞いた後、悲しむよりも迫害した当時の村人と獣達に怒っていたクリス

ぶだろう。そうすれば、結果はどうあれ、クリスとモーントがこうして会うことは二度と出来なくなってしまう。クリスは、そんな事になるのは絶対に嫌だと思った。

村のすぐ近くにある小さな丘まで来たら、クリスとモーントはお別れだ。ここは角度的に村からは死角になっているので、見つかる心配がないうえ、ここまで来れば危険な獣の類は滅多に出ないから安全なのだ。

「それじゃあまたね」

「うん。話の続きはまた今度」

丘に立つモーントに手を振りながら、クリスは村へと帰っていく。お話の続きを想像して、次に山へ入る理由はどうしようか、と考えながら。けれど、クリスはまだ知らない。「また今度」なんて約束が果たされる保証なんて、この世の何処にもないのだと言うことを。

村中に響く怒号と悲鳴、馬の嘶きや誰かの断末魔。クリスはそれらを、へたり込みながらどこか壁一枚隔てたような意識で見ていた。斬り殺される男の人。殴り殺される老人。踏み潰される子供。服を破られ、その場で犯される女の人。頭に布を巻いた、明らかに山賊といった風体の者達。その光景にまるで現実味を感じることが出来な

に、モーントは困ったように笑いながらこんな話を始めた。

「獣と鳥の特徴を両方持っていたコウモリは、獣の前では獣として、鳥の前では鳥として振る舞っていたら、その内両方から仲間外れにされ、洞窟の中でしか生きられなくなったんだそうだよ。結局のところ、その意思に関係なく、どっつかずの僕みたいな化け物を受け入れてくれる場所なんて何処にもなかったのさ。僕と同じ御伽噺の生き物でさえそう。みんなみんなひとりぼっちだった」

涙が涸れ果て泣けなくなり、乾ききった笑顔を向けるモーントを見て、クリスは彼の昔話を教えて欲しいとせがんだ事を後悔した。そして、何故か胸が締め付けられるような悲しい気持ちになった。

モーントが自分の身の上話をしたのはそれっきりだった。それから後は、モーントがこの地を離れている間に目にした沢山のモノについての話をしてくれた。クリスの住む村とは比べものにならない位大きな都市。道の代わりに水路が張り巡らされた町。ただひたすらに広がる砂の大地と、そこに建つ白亜の宮殿。モーントが狼の姿で丸一日全力で走り続けても終わりが見えないほど長く伸びた城壁。十字架の威光も届かない、未だ古

い。この村はクリスが生まれるずっと前から、こういった賊に襲われる事はなかった。北の果て、周囲を山に囲まれたこの村は畑を増やすのも一苦勞で、規模は小さく蓄えも殆どない。その上危険な獣が数多く生息しているから、山賊が根城にする利点が少ないのだ。しかも今は夏の入り、こんな村を襲うとしたら、それこそ収穫の直後でもなければ盗る物なんて殆どない。

クリスは後になって知ったことだが、彼らはここより南の町を根城にしていた山賊で、帝国軍の大規模な討伐で北へ北へと追いやられた残党だった。よく見れば誰もが疲弊した顔をしていたのだが、そんなことに気がつく余裕なんて誰にもなかった。

クリスに漸く現実感が戻ってきたのは、へたり込むクリスを山賊の一人が押し倒したからだ。身体を這い回す手と吐く息の臭さの不快感に必死になって抵抗するが、大の男に押し掛かれてはどうにもならない。「助けて」と叫びながら身を振り、顔を背けて目を瞑るのが精一杯だった。けれど、不意に身体が拘束が緩んだので、クリスが不審に思って目を開けると、そこには驚愕に目を剥いた山賊がいた。瞬きの間に山賊は吹き飛ばされ、代わりにクリスの視界を覆ったのは眩い一面の銀色だった。

クリスなど腰ほどの高さになる巨軀。五指からは鋭い爪が、頬のない口からは強靱な牙が覗いている。全身を覆う体毛は、今まさに夜空に浮かぶ満月の様な銀色。腕は大人の胴よりも太く、丸太の様な二本の脚で地面を踏みしめている。

正しくウェアヴォルフ人狼——クリスでさえ、その姿は初めて見るものだが、それが誰であるか見間違えるはずがない。モーンントはクリスをちらとだけ見ると、眼前にある阿鼻叫喚の埒場へと飛び込んでいった。

そこから先は一方的だった。何せ山賊が持つ粗製の武器では、モーンントの肌に傷一つ付けることすら出来ないのだ。向かってくる者達は腕の一振りできき払い、逃げようとする者は瞬きの間に追いつき叩き潰した。嵐が通り過ぎるかのようにな、あつという間に山賊は皆動けなくなっていた。村人も皆、そのあまりに現実離れした光景に、呆然とするばかりだ。けれど、冷たい夜風が一瞬肌を撫でると、酔いが醒めたかのように再び悲鳴が上がった。

化け物だ。逃げろ。助けてくれ。口々に喚きながら、腰の抜けた足取りで我先にとモーンントから離れていった。その時のモーンントの表情に、クリスだけが気がついた。村人達の反応に悲しむわけでも、憤るわけでもなく、ただ「ああ、やつぱり」

そう言うと、まるで空気を吸って膨れ上がったかのように、目の前の少年が巨大な狼へと変貌を遂げていた。背を向けて走り去ろうとするモーンントを、クリスは呼び止めた。

「約束、忘れちゃだめだからね。お話の続き。また今度って言ったじゃない。私、ずっと待ってるから」

モーンントはその凶暴な顔が可愛らしく見えるほどきょとんとして、ゆつくりと頷き、今度こそ山に向けて走り去っていった。

大人たちに叱られながら村に戻った少女は、誰かに呼ばれたような気がして、山の頂上へと視線を向けた。崖のようにせり出しているそこに居たのは、麓からでもその姿を見ることが出来るほどに大きな一匹の狼です。自らと同じ色の月輪を背負い、狼は天に向かって吠えました。一度、三度、四度……大人たちが怯えるなか、少女だけは怯える事なく、その遠吠えに耳を澄ましています。だから、少女は心の中でそれに答えました。

——こちらこそありがとう。そして、また会う日までさようなら。

——夢を見た。子供の頃に何度も聞いた、祖

といった諦めの滲んだ、見覚えのある乾いた微笑。モーンントは逃げる村人を余計に怯えさせないためか、ゆつくりとした足取りで山へと歩いて行った。クリスはその姿が見えなくなってからハッと立ち上がり、モーンントの後を追いかけた。背後から父が自分呼び止める声したが、クリスは聞く耳持たなかった。

「モーンント！ 待って、モーンント！」

大声でモーンントの事を呼びながら、クリスは山道を駆け上ろうとしたところで、ふと思いついて何時もの丘へと向かっていった。思った通り、銀色の少年はそこに居た。

「こんばんは、クリス。良い夜だね……初めて君と出会った日と同じ、満月が浮かぶ雲一つない空」

クリスへ振り向きながら、モーンントは何時もと同じような声で、何時もと同じようにそう言った。けれど、その表情はどうしようもなく乾ききっていた。

「クリス」

「嫌」

名前を呼ばただけで、その後続く言葉を察し、クリスはそれを遮った。モーンントが口を開こうとする度に、嫌だ嫌だと駄々っ子のように喚く

母のお伽話。その中で一番のお気に入りだった、狼と少女の密やかでさやかな交わり。見たことのないその情景を夢に思い描けるほど、私はこの話を繰り返し祖母にねだっていた。今になって夢に見たのは恐らく、先日祖母が倒れたからだろう。

「もう、私もいい歳だからねえ」

ベッドの上で体を起こしながらそう言って、祖母は窓の外にある山を見上げていた。まるで誰かを待っているかの様なその姿に、もしかしてあなたのお伽話にでてる女の子は祖母自身だったのではないか？ なんて馬鹿みたいな事を思ったからかもしれない。私が朝一番に井戸の水汲みに向かうと、不意に背後から声をかけられた。

「あの、ちょっといいかな？」

水を汲んだ桶下ろしながら振り向くと、フード付きの外套を被った、いかにも旅慣れた雰囲気の人がある。そこに立っていた。声と体格から、私と同年代くらいだろう。

「初めまして。この村に住むクリス……ああ、いや、クリスティアーネさんに会いに来ただけだ。君、どこに住んでいるか知らないかな？」

「クリスティアーネは私の祖母ですが……失礼ながらどちら様でしょうか？ あと祖母にいったいなんのご用ですか？」

私は警戒心を隠さずに、少年と向き合う。私

事しか出来なかった。クリスとて分かっているのだ。もうどうにもならないのだということが。

「クリス……僕はもう此処には居られない。お別れだ」

それでも、モーンントはきっぱりと言い切った。悲しそうな、でも決して泣くことが出来ない彼の表情を見て、クリスは涙が溢れるのを抑えることが出来なかった。

「なんで……なんで貴方がここを離れなければいけないの？ 貴方は私達を助けてくれたのに、どうしてこんな目に遭わなくてはいけないの？」

——どうして、また貴方がひとりぼっちにならなければいけないの？

ぼろぼろと大粒の涙を流して理不尽に憤るクリスを、モーンントは優しく抱き寄せた。

「ありがとう、クリス。僕のために泣いてくれて。そしてこの一年、一緒に過ごしてくれてありがとう。君と過ごした日々は、決して長いとは言えなかったけれど、これまで過ごしてきた数百年のどんな時よりも幸せな時間だった」

モーンントはすっと抱き留めていたクリスから離れた。見下ろせば、漸く抜けた腰が元に戻ったのか、松明を持った男達がクリスを探しに山の中へ入って来ている。

「それじゃあ、もう行くね」

の村に限った話ではないが、地方の村というのは閉鎖的であり排他的なものなのだ。特にここは帝国の北端。観るものもなければ資源となるものも殆どないから、行商人だつて滅多に来ない。他の町、国外に出るにしても態々山越えをしなければならないような場所になる人なんて殆ど居ない。それに、祖母はこの村から出たことがない。このような年頃の余所者と関わる機会なんてあるはずがないのだ。

目の前の少年は私がそう言う私の顔をじっと見て、ああ、と声を漏らした。

「——成る程、確かに面影がある。いや、こちらこそ名乗りもせずに不躰な事を……名を言う事なんて、ここ久しくしていなかったから、つい」

外套のフードを脱いだ瞬間、私は思わず息を飲んだ。露わになったのは、朝日を浴びてきらきらと輝く銀の髪。その少年が口にした名を聞いて、私は息どころか心臓さえ止まるのではないかと思った。

「僕の名前はモーンントって言うんだ……彼女への用はね——」

少年——モーンントは笑った。その名が表す月と言うよりも、今まさに彼を照らす朝日のような、柔らかなくも暖かい微笑みだ。

「ずっと昔に彼女と交わした、大切な約束を果

たすために会いに来たんだ」

この日、ベッドの上で寝ていた祖母が忽然と姿を消した。村中総出で山狩りまで行ったのにも関わらず、その痕跡すら見つけることが出来なかった。

祖母が何故いなくなったのか……その理由を知る者は、私を除いて一人もいない。

羽が朽ちた天使が叫ぶ

金属を打ち合わせたような音が耳に入り、目が覚めると、そこには見渡す限りの青色が広がっていた。はて、この青色は何だろうか——と思いを巡らせ、それが空であることに気付くのは時間をかからなかった。では、何故空を見上げているのかと言えば——記憶を手繰り寄せる。そういえば、確か昼休みに屋上で眠っていたからだろう。

そこで、現在の自分が置かれている状況に気が付いた。そう、私の眠りを妨げたあの金属音は、五限の始まりを知らせるチャイムではないか。私は小さくため息を付き、仰向けから上半身を起こし、地べたに座る態勢に移る。この調子だと、五限には間違いない間に合わないだろう。どうやら、思っていた以上に気持ちよく眠り過ぎていたらしい。そう結論づけた私は、出席することを諦めて屋上でゆつくりとサボタージュすることに決めた。六限には出席するが、五限はサボる。そうしよう。

羽が朽ちた天使が叫ぶ

そうと決まれば話は早い。今日は確か、購買

で昼食を買った後、屋上に来て食べる前に眠りに付いた筈だ。脇に置いていたプラスチック袋から、お目当ての物を取り出す。

「あつたあつた。クリームパンと、ミルクティー」紙パックのミルクティーにストローを刺し、クリームパンの包装を開ける。頂きます、と小さく呟いてクリームパンに一口、二口とかじり付く。中のクリームの上品な甘さが、パンと混ざり合って口の中一杯に優しく広がる。まさに絶品である。いまいちパツとしない購買で売っているパンの中でも、クリームパンだけは別格だ。

半分ほど食べた所で、ミルクティーのストローに口を付けて飲み始める。こちらは、至って代わりのないミルクティーだが、それでも並以上の味はする。元々、私がミルクティーを好きだというのも理由の一つだろう。

「ああ、幸せ」

皆が一生懸命に面倒臭い授業を受けている中、自分だけが優雅にランチャタイムなのだと考える

と、小さな優越感を得る。我ながら、小さい器の人間だと思いが感じるのだから仕方ない。

そんな小さな幸せを得ている時、屋上の扉が開く音が聞こえた。思わず、体を強ばらせてしまい、急いで振り向く。見回りの先生でも来たのか、と身構える。

だが、そこにいたのは、我が高校の制服を着ていた可愛い女の子だった。美少女、と形容しても違和感がない容姿を持っている。その子は、どこか驚いたように私の方を見ていた。

それに対して、私は。

「……なんだ」

強ばらせた体の緊張が解けた、だけだ。この時間帯で屋上に来たという事は、彼女もサボリなのだろうと思いつたからだ。

に、しても随分な美少女である。こんな美少女がサボリとは、人は見かけによらないものだ。美人でも不細工でもない、普通の私からしたら羨ましい容姿である。

人間科学部
人間科学科2年
守山文也